

## 貯蓄のゆくえ

鈴木一史

—埼玉県立文書館収蔵「『絵ばなし』研究会」関連資料と埼玉県立久喜図書館所蔵紙芝居『ヨイコノカクゴ』から—

### はじめに

貯蓄をとおした戦争への協力を、意気込み学んだ。やがて、貯蓄の継続が、苦しい戦局のなかでせめても国策や戦争に貢献できている、といふ自負のよりどころとなつた。日中戦争期から太平洋戦争期にかけての貯蓄に関わる、紙芝居を介した事業と作品からは、戦争協力の題目と義務だったはずの貯蓄が、使命感と充実感を得る手段へと転化した様相を看て取れる。

戦時下の紙芝居が国策や戦争の宣伝において担つた役割は、これまで作品の発掘や紹介、地域における実演の広がりといった諸側面から明らかにされてきた(1)。しかしながら、国策を伝える手段としての紙芝居が地域で広められた経緯や、戦争末期の作品についての検討は、未だ端緒についたばかりである。今後は、各地の実演実績についての点描的な紹介を脱して、紙芝居が広められた目的や実演対象を含めた検討、あるいは、紙芝居に示された戦争参加のありようを考察する段階への深化が求められよう。

さしあたつて、かかる深化のために重要な視角は次の二つである。

一つは、紙芝居によって国策が広められた過程と、それを担つたであろう地域の指導者層への注目である。国策や戦争に関わる宣伝は、地域の指導的地位にある人物が周知すべき物事を把握し、社会的な影響力を有すると認められたであろうメディアをとおして広められた。ならば、その過程を担つた者に期待され、あるいは果たすべきと自認され、ひいては実際に果たされた役割を明らかにする必要がある。すなわち、地域における実演に至る過程と、その内実の検討である。

いま一つは、同時代の社会や紙芝居に関する主題への注目である。先行研究が明らかにしたとおり、紙芝居は人びとの生活に直結する形で戦争への協力を求めた。これは、紙芝居が街頭における子ども向けの娯楽として出発したため、人びとの生活実感にうつたえる手段と効果を有するに見做されたことに起因しよう。だとすれば、貯蓄や節約、傷病兵への配慮といった、人びとの生活において実行を求められた戦争協力の徳目やなすべき行動規範への注目によって、かかる手段と効果の実効性を

検討する手がかりを得られるはずである。ただし、単に作品から主題に關わる鍵語を抽出するのみでは、置かれた文脈を無視した羅列に留まる。なぜなら同じ言葉や行動でも、戦局の推移や社会の情況によって、その程度や位置付けは異なったからである。ゆえに、紙芝居に描かれた個別の主題について、関連資料や作品を素材に、その内実と変遷とを跡付ける作業が必要となる。

本稿ではこれらの現状と視角に基づき、紙芝居を介した、地域における指導者の育成と、貯蓄奨励を主題とした作品とに注目する。同時代の日本では、住民同士の話し合いの場として常会（詳細は後述）が設けられ、戦争の意義や貯蓄といった国策への協力が、紙芝居の上演などにより要請された。特に貯蓄は、①戦時国債の消化資金確保、②軍需生産を中心とした生産力拡充のための資金確保、インフレ防止のための消費抑制などの要請から<sup>(2)</sup>、戦費の必要性や兵士への援護といった意義付けにより奨励された<sup>(3)</sup>。貯蓄は生活と密接に関わる主題であり、特に広く宣伝する必要があつたと推察される。よって、紙芝居を介した指導者の育成からは、戦時下において求められた指導者のあるべき姿を、そして作品からは、生活水準を切り下げるでも貯蓄を回さねばならぬ必要性を訴えた理路を描出できよう。

よつて本稿では、指導者の育成を目的に、日中戦争期の昭和十五年（一九四〇）に埼玉県で開かれた紙芝居の普及事業を取り上げ、その目的や開催実態を検討する。そして、貯蓄を主題とした戦争末期の作品として、戦争末期の昭和十九年（一九四四）に制作された紙芝居『ヨイコノカクゴ』を取り上げ、作中における貯蓄の位置付けを検討する。更に、これらの検討結果を踏まえて、紙芝居による国策の普及に關わった者の役割

と貯蓄を主題とした紙芝居作品の特徴、ひいては戦争への協力としての貯蓄の位置付けの変遷を、試論的に素描したい。

なお、資料引用に際しては通読の便を考慮して適宜現用字体に改め、句点等を補つた。また今後の研究の進展に資するよう、末尾に図版を掲載した。

## 一 「よき指導者」の育て方

### —「『絵ばなし』研究会」関連資料から—

昭和十二年（一九三七）の日中戦争勃発後、人びとの戦争協力を促進するため、国民精神総動員運動が開始された。なかでも、地域における具体的な運動の場とされたのが常会である。常会とは、二宮尊徳の思想を継承した報徳社における会合の呼称が起源とされ、昭和七年（一九三二）に民間団体である中央教化団体連合会がその開催促進を図つたとされる<sup>(4)</sup>。

住民同士の話し合いの場として位置付けられた常会は、文部次官通牒「常会ノ社会教育的活用並ニ指導ニ関スル件」や内務省通牒「部落会町内会等ノ整備指導ニ関スル件」で政府から思想的・経済的な統制の浸透を図る役割を期待された。とはいえ、単に集まり感想を言い合うだけでは会が進まず、物事も決められない。ゆえに、円滑な意思疎通を図り、国策を周知するために指導者が必要とされた。

かかる要求に応えた試みの一つが、昭和十五年九月に埼玉県で開かれた『絵ばなし』研究会（以下、本稿では主に「研究会」と表記）である。以下では、研究会に關わる資料である、（1）開催前月に発出された開催通知、（2）開催当月に研究会の様子を報じた新聞記事、（3）開

催翌月発行の関連雑誌で事業の成果を伝えた報告記事を素材に、研究会の内実を検討したい。

### (1) 開催通知

昭和十五年八月三十日付けで、埼玉県総務部長・埼玉県学務部長名により各市町村宛てに発出された、「『絵ばなし』研究会ニ関スル件」である。なお本稿では、埼玉県立文書館が収蔵する「埼玉県行政文書」（国指定重要文化財）の欠落が多い昭和二十年代前後の文書を補完する目的で行われた、戦中戦後行政文書補完事業により作成された複写本を基に検討を進めたい。(5)

### 【図版1】

まず主催者及び担当部署を確認する。研究会の主催者は、「二、主催

埼玉県」との記載から、埼玉県であると認められる。具体的な部署については、文書番号「十五時発第一、七五八号」の記載が手がかりとなる。

「発」は発出の意を示すと思われるため、「時」が埼玉県庁内の発出部署を指し、研究会を主に所管した部署である可能性が高い。「四、科目並に講師」で「2. 常会と紙芝居 時局課主事」と記されていること、また(3)報告記事(後掲)に「埼玉県総務部、時局課の各位に満腔の感謝と敬意を捧げる」と記されていることから、当該文書は昭和十三年(一九三八)に新設された埼玉県総務部時局課(6)の所管により、同総務部長名で発出されたと思われる。加えて、対象が小学校の職員であることや、常会の所管が文部省であつたため、連名の発出名義として、学校教育を所管する埼玉県学務部長が記されたと推測される。以上から、研究会は埼玉県が主催し、同県総務部時局課が開催に際しての実務を担当したと考へて差し支えない。

次いで「一、趣旨」には、左記のとおり開催目的が掲げられている。「時局に対処すべき国策を市町村部落民に限なく惨透せしめ其の実効を擧ぐるためには平易通俗なる方法に俟たねばならぬ。而して其の方法は素より少からずと雖も街頭に発生し巧に大衆を捉ふる紙芝居の形式を利用するが如きは最も有効適切と信ず。近來各地に時局宣伝教化宣伝の事業等に紙芝居の利用漸く旺んならんとする傾向に鑑み茲に本県精勤実践綱(ママ)拡充強化と相俟て紙芝居の普及活用に關し本研究会を開催し町内又は部落に於ける常会指導の一助たらしめんとす。」

注目したい箇所は三点で、一点目は紙芝居の呼称である。ここでは「紙芝居」という呼称が使われるいっぽう、研究会の名称は「『絵ばなし』研究会」である。同時代における紙芝居の呼称の複数性を探る手がかりといえよう。二点目は同時代における紙芝居の社会的位置である。「街頭に發生し巧に大衆を捉ふる」、「最も有効適切」、「利用漸く旺んならんとする傾向」という文言からは、紙芝居というメディアが昭和十五年時点で地域に普及し、人びとに幅広く国策を伝える上で有効な手段と認識された傾向を読み取れる。二点目は常会における紙芝居の活用である。国策を伝え、住民の利害を調整する場でもあつた常会に關わる「本県精勤実践綱拡充強化と相俟て……町内又は部落に於ける常会指導の一助たらしめんとす」という目標設定からは、国民精神総動員運動の充実を目標に、紙芝居の普及が試みられた筋道を見出せる。

講対象者や会場、地域区分を確認しよう。受講対象者は「五、会員」に「部落常会指導の適任者として市町村吏員・小学校職員・其の他教化運動に携わる者にして市町村長に於て推薦せる者一名乃至三名」と指定されている。常会の指導者として主に想定されたのは、役場や小学校の職員であった。多数の参加者が想定されたためか、「三、日程」のとおり、川口市を除いて開催時点で市制施行されていた川越・熊谷・浦和の各市や各郡を単位に地域区分が定められ、各市や郡における中心的な地域の高等女学校・小学校・公会堂・役場が会場として設定されている<sup>(7)</sup>。地域において一定の知識を有し、影響力を發揮し得る層が研究会の受講対象とされ、概ね公の施設や学校を会場に開催されたことが読み取れよう。ここからは、研究会の内容について、「四、科目並に講師」、「六、開催順序」から確認したい。実施順に記すと、午前は、①国民精神総動員運動関係者による時代情況のとらえ方とあるべき宣伝の姿（「時局認識ニ関スル講演」）を、②埼玉県総務部時局課の職員による、常会における紙芝居の位置付けについての講義（「常会ト紙芝居ニ関スル講演」）が行われた。午後は、③教育紙芝居の制作や普及を担つた日本教育紙芝居協会の講師による、紙芝居の概要についての講義と作品の実演（「紙芝居概論ト実演」）を、④それを受けた懇談や参加者による実演の練習（「懇談」、「会員実演」）が行われた。

右記以外に、「宮城遙拝」や「出動将兵武運長久傷病将兵平癒祈念並ニ戦没將士ニ感謝ノ黙祷」という項目があり、前線の兵士への配慮や、銃後との紐帶の強調といったねらいを窺わせる。また「備考」の「当日ノ弁当ハ県ニ於テ準備ス」との記載からは、主催者の負担により参加者用の食事が提供されたことが分かる。

(2) 新聞記事

前項では、主催者側が作成した通知から、研究会の主催者や内容を確認した。しかし、開催通知のみでは、研究会の様子はつかみがたい。そのため、開催期間中に掲載された（2）新聞記事「『時局紙芝居』登場常会指導者を柔かに指導」<sup>(8)</sup>【図版2】から、研究会の様子を検討しよう。

まず、開催理由を確認する。冒頭に「農村の部落常会を単位とする時局認識の最良法は平易な紙芝居が絶好となつて」という要約が記されている。記事の副題である「柔かに指導」との一節と考え合わせれば、開催通知と同様に、「常会」が人びとの教化の場と見做され、人びとに時代情況を親しみやすく伝える手段として紙芝居へ期待が寄せられた傾向を読み取れる。

次いで、講師についての情報を一瞥しよう。開催通知では肩書のみの記載だったが、記事では「石川時局課主事」、「精動練成所幹事古川武氏」と紹介されており、主催者である埼玉県時局課の職員、「指導者訓練の機関」<sup>(9)</sup>であつた精動練成所の者が講師を担当したことが分かる。

ここで注目したいのは、掲げられた上演作品である。（1）開催通知における科目「紙芝居概論ト実演」で取り上げられた『貯金爺さん』及び『がんばり村』は、日本教育紙芝居協会が国策の宣伝を目的に、「国策紙芝居」シリーズとして発刊した作品である。そしていずれも、国債の消化等によるインフレ対策を目的に実施された国民貯蓄奨励運動に關わり、大蔵省国民貯蓄奨励局の指導で作られた<sup>(10)</sup>。実際の上演作品として、貯蓄に關わる紙芝居が挙げられており、記事において「時局即

応の絵ばなし」と位置付けられている点から、常会での指導項目として貯蓄が重視されたことが推測できる。

### (3) 報告記事

以上に加えて、出講団体側の立場から研究会の位置付けを検討するため、日本教育紙芝居協会関係者の手による(3)報告記事「埼玉県主催教育紙芝居研究会に臨んで」(11)【図版3】を取り上げたい。執筆者の平林博は羽田国民学校の訓導を務めた人物で、「本協会よりの出張講師」として「平林嘱託」という文言が記されているため、同協会にも関わり、研究会に出講したと思われる。

まず、開催理由を確認しよう。(1)開催通知で「国策を市町村部落民に隈なく滲透せしめ其の実効を挙ぐ」と説明された趣旨が、(3)報告記事では「国家新体制……の実効を挙げる為には、其の最下位の組織たる部落常会を如何にしても徹底させ、之を発達させねばならない。部落常会を発展させるには、よい指導者を養成することがその第一である」と詳説されている。国策を地域の人びとに行き渡らせるためには、人びとに情報を伝え、導く媒介としての指導者が必要であるという認識のあらわれといえよう。地域住民の指導者層として想定される者に対し、紙芝居の利点や実演方法を教え習得を促し、各地域で紙芝居をとおして国策の伝達や宣伝への従事が期待された。

つづいて、実演作品に注目したい。(3)報告記事には「使用せし作品」として八作品が記されている。これに加えて先の(2)新聞記事で挙げられた実演作品と合わせた計十作品が、【別表】のとおりである。ニュース紙芝居を除けば、軍国美談や地域における団結の重要性を示し

た作品、国勢調査や満蒙開拓青少年義勇軍といった国の事業に關わる紹介と、主題は様々だが、概ね戦争に關わる国策の普及啓発や、戦争協力の心構えの宣伝を掲げた作品が実演された傾向が窺える。特に、貯蓄に關わる作品は十作の内、『銃後の力』、『草鞋長者』、『がんばり村』、『貯金爺さん』と半数近い四作を数える。ここで付言すれば、同時期に埼玉県総務部長名で各市町村長宛てに発出された「紙芝居貸出及配布ニ関スル件」(12)【図版4】では、「本県ニ於テモ左記紙芝居ヲ備付シ国策滲透宣伝貸料(ママ)トシテ希望ノ向へ貸出スコト、相成候条充分御活用相成度候」、「演出ニ際シテハ地方ノ状況演出ノ時期等ニ依リ画面ヲ適宜取除キ或ハ説明ヲ適當ニ工夫相成度」と、国策の宣伝に關わる紙芝居の貸出や使用の奨励が通知されており、「舞台付紙芝居目録」に記された九作品の内、貯蓄に關わると思われる作品は、『草鞋長者』、『日の丸貯金』、『貯金爺さん』、『がんばり村』、『金はお国へ』と半数以上の五作を占める。これらの傾向から、(2)新聞記事の検討でも述べたとおり、常会指導において貯蓄の奨励が重視されたと見做せよう。

更に、(3)報告記事で特筆されるのは、研究会の内容や上演作品のみならず、受講者の反応が記されている点である。県当局者の「とても皆さん熱心です。どの会場でも申込者の数より二三十名も多いのですから」という発言や、記事中の「各村共主要人物の粒揃ひ何かと忙しい方ばかりなのに、午前九時から午後四時すぎまで、一つく真剣にききもらさじと耳を傾けられる。私もその様子を眺めて、如何に此の県の方々が、時局に對して真剣であるかを伺い知り」という評言が該当する。主催者や講師など運営に携わった側からの觀察ではあるものの、少なくとも、想定よりも多くの人びとが研究会に集まり、熱心さをともない聴講した

様子が読み取れる。

しかし、生命の危険や戦争の帰趨に直結しがたい情況下で、貯蓄の奨励が説得力を有したか否かは、一考の余地があろう<sup>(13)</sup>。それを考える手がかりのひとつが、国民精神総動員運動の実践例として埼玉県秩父郡大滝村（現秩父市）を取材した新聞記事<sup>(14)</sup>である。記事は、必ずしも模範的な村ばかりではない実情を、「県庁の役人の空疎な号令ばかりで、そんなら実際にどんなにすればよいかの指導が行届いてゐないといふ声もあれば、負債が多いのに貯蓄どころの騒ぎぢやないといふ村もある」と報じている。貯蓄という目標を掲げて単に達成を促すだけでは、貯蓄が実効的に実行され得なかつた実情が垣間見える。

この記事で特に注目したいのは、「実際にどんなにすればよいかの指導が行届いてゐない」との苦言である。いくら国策が宣伝されても、それぞれの地域や人びとが直面した事情は異なる。ましてや、働き手である成人男性が徴兵されるなか、暮らしに余裕があつたとは限らない。ゆえに、国策への画一的な協力を求められても対応は難しかつたのではないか。記事は、かかる情況下で必要とされる存在について、次の指摘をもつて締めくくられている。

「地方農産漁村では”理論よりも実際”そして”よき指導者”が切実に要求されている」

研究会での養成が目論まれた指導者には、紙芝居など多くの人びとにとつて親しみやすく、且つ理解できるであろうメディアを媒介に、国策を広める役割を求められた。しかし、この記事で望まれた指導者とは、

国策を平易な言葉に言い換え、伝える者ではなかつた。置かれた現状と求められた理念とを理解し、個々の情況を踏まえた上で、実効的な具体策を進める者だつた。ここに、戦時下において地域の指導者に求められた役割、そして国策の周知をめぐる目的と実情との乖離を読み取れる。

埼玉県の主催、同県総務部時局課の所管により県内各地で開催された「『絵ばなし』研究会」は、人びとに広まつてゐた紙芝居を使い、常会の場を中心に国策を知らせる目的があつた。常会の指導者としての役割を期待され、研究会の参加対象に指定されたのは、市町村の役所や小学校の職員であつた。開催にあたつては、日本教育紙芝居協会から講師が派遣され、様々な紙芝居作品が実演された。なかでも、貯蓄を主題とする作品が比較的多く実演され、伝達すべき国策として重視された特徴が明らかとなつた。しかし地域においては、研究会が目標としたような、分かりやすい言葉で貯蓄の意義を伝える指導者ではなく、各地の実情に合わせて実効性を伴う行動を促す指導者が求められた。

## 二 「善き少国民」の育て方

### —紙芝居『ヨイコノカクゴ』から—

太平洋戦争末期の昭和十九年、ミッドウェー海戦の敗北やサイパン島の占領などを経て、戦局は悪化していた。かかる情況下における貯蓄の位置付けを検討するため、埼玉県立久喜図書館が所蔵する紙芝居『ヨイコノカクゴ』<sup>(15)</sup>【図版5】を素材として取り上げたい。

はじめに、主な書誌データを掲載する。

・印刷納本・昭和十九年三月四日

・発行日..昭和十九年三月十日

・作 者..脚本・絵とも記載なし

・製 作..東京都

・発行所..東京都京橋区銀座四ノ四 興亞画劇株式会社

・定 価..金三円二十銭 (送料は内地三十銭、外地六十銭)

・法 量..横三三・七cm、縦・二六・二cm

・数 量..全二十枚

発行者である興亞画劇株式会社の詳細は不明だが、昭和十九年三月一日に設立された後、同二十五年（一九五〇）に休業し、同三十八年（一九六三）には建築用諸材料の売買業に目的が変更されるとともに、三沢産業株式会社に商号変更されたことが分かっている。また、戦時下において空襲で罹災したとされる<sup>(16)</sup>。東京都製作の旨が記されているため、東京都からの発注により作られたのは明らかである。地域における普及の様相は詳らかではないが、東京都杉並区での巡回や、福島県郡山市での郡山翼賛文化協会による購入記録が残されている<sup>(17)</sup>。

次いで、作品の梗概を紹介したい。舞台は、具体的な地名は記されないものの、春を迎えた雪国のある村である。学校で体操を終えた子ども達は先生から、楽しいものが来たので家に帰つて父母に尋ねるよう指示される。「楽しいもの」とは、「演劇挺身隊」<sup>(18)</sup>による漫才の公演だった。漫才の内容は、漫才師が戦地の飛行基地へ慰問した際の出来事を述べるものだった。いつでも出撃できるよう準備する兵の様子に感動しながらも、敵機を迎へ撃てる飛行機がない情況や、空中戦における自爆の様子が紹介される。翻つて銃後の人びとの努力不足が示唆された上で、飛

行機を戦地に送る必要性が宣伝される。

漫才のさなか、漫才師から「君、飛行機は何で出来るか知つてゐるか」と問われた子ども達は、答えが分からず郵便屋のおじさんに質問する。

「きまつてゐるがナ。お前さんたちのする貯金だよ」、「貯金で、飛行機も軍艦も作るんだよ」と返され、得心した子ども達は、「僕たちにも飛行機を造るお手伝ひが出来るんだやないか」と意気込む。

最後は、「僕たちは、今日から、うんと貯金をして、兵隊さんが一番ほしがつてゐらつしやる飛行機を何万台でも作つて送りますよ。飛行機は僕らが引受けました。僕らの貯金で引受けました。どうか、ごあんしん下さい」という貯蓄への誓いで締めくくられる。

梗概を踏まえて、作品の特徴を貯蓄との関わりから三つ挙げたい。

一つ目は、国策が劇中劇（漫才）の形式で示された点である。作中、貯蓄の奨励は、慰問のために村を訪れた演劇挺身隊が披露する漫才の一部、という形で宣伝されている。具体的には、挺身隊の両名が各地の前線で接した兵士や空戦の様子を交えつつ、「銃後の我々がだらしがないからだぞ！」という叱咤や、（不平不満を口にしない）「兵隊さんが、はじめて一言、飛行機が足りんと言はれた」「ああ、僕は泣けてくる」といった、心情にうつたえる方法で貯蓄の重要性が示された<sup>(19)</sup>。直截な説明調で、国策への協力を喧伝するのではない。登場人物の体験から、叱咤や同情を伴い、貯蓄の重要性を感情面から語らしめようと試みたねらいを読み取れる。

ただし情緒に訴えれば、現実把握の精度と多面性は損なわれ、具体的な根拠に乏しくなる。ここに、実現可能性の欠如という二つ目の特徴を見出せる。努力不足だと決めつけられ、為すべき行動を義務付けられ、

行動の目的を意義付けられた者は、使命感を培い、目標を達成するため主体的に行動する。作中では、単純明快さを優先したためか、飛行機の必要性が示されるものの、具体的な戦況には触れられない。また、前線の飛行機不足は強調されるが、数値的な基準は示されない。ここに説得的な根拠の欠如を見て取れる。結果、単に銃後の人ひとの努力不足が指弾された。その上で、「飛行機を何万台でも作つて送りますよ。飛行機は僕らが引受けました。僕らの貯金で引受けました、どうかごんしん下さい」と、前線の兵士たちが心置きなく戦うためという意義付けにより、情緒的な側面から貯蓄が奨励された。

されど疑問が生じよう。大人に貯蓄のすすめを説いたとて、生活という現実の前では説得力に乏しい。貯蓄額の割り当てがあればなおさらである。さりとて、子どもの貯蓄で飛行機の莫大な製造費を貯えるはずもない。そこで三つ目として、現実としての大人が後景に退き、理想としての子どもが貯蓄の主体になる、という特徴が浮上する。作中で漫才の宣伝に接し、貯蓄の意義を知り、やがて貯蓄に努める決意を固めたのは、子どもであった。「僕たちにも飛行機を造るお手伝ひが出来るんだやないか」という一節は、戦場に赴けなくとも戦争に参加しているという充足感を意味したであろう。対して大人たる漫才師は、体験談から飛行機の増産という課題を提起し、飛行機は貯金で成り立つという視点を示す。けれども、貯蓄をあからさまには奨励しない。ここに、子どもが自発的に貯蓄の重要性に気付くよう、大人が素地を整える、という役割分担が設けられている。

以上に挙げた三つの特徴から分かるとおり、戦局が悪化し、貯蓄の意義が疑問視されかねない情況下でも、ひきつづき貯蓄の必要性は宣伝さ

れていた。また、貯蓄の指導や実践の役割を担つたはずの大人のみならず、子どもにも貯蓄の励行が期待された。こうした傾向は、例えば研究会での上演作品『貯金爺さん』のように、地域の有力者による詳しい説明で戦況についての知識を得て、貯蓄の重要性に目覚めた老人が、周囲に貯蓄に勤しむようはたらきかけるといった筋道とは対照的といえる。

ただし、情緒に訴えるという『ヨイコノカクゴ』の特徴を、戦局の悪化による諦念や、自棄の表れと判ずるのは早計である。東京都品川区で行われた、貯蓄実践に関する次の報告<sup>(20)</sup>は、現実と乖離していたであろう目標がそれでも掲げられた所以と、戦争末期における地域の指導者にとつての貯蓄の位置付けを伝えている。

「昭和十五年四月、貯蓄命令を政府より待つのみでなく、進んで貯蓄報国を念願に教育紙芝居品川双葉会を結成し、毎水曜日、子供を集め紙芝居を無料で見せ、其の代り水曜日毎に御小遣いを貯めさせ当日持参し、郵便貯金として預入れてやり、双葉会子供国民貯蓄組合を結成し、父母に孝君に忠を目と耳よりの教育方針として其れ以来、早や四年、子供等は毎週新しい紙芝居を見るのと、貯蓄の増して來るのが面白くなり、水曜日を楽しみに、必ず時間を守り、夏はラジオ体操、冬は火の番、驚く程實に善い子となり、善行の奨励に努力し、貯金も平均一人月三円以上になりました。如何に紙芝居が子供に対し、必然的な要求と生き生きとした教育指針であるかを四ヶ年の体験に依り感じられ、子供よりも楽しくなつて参ります。善き少国民育成の為、益々御発展と御健闘を御祈りして現地報告と致します。」

この報告には、戦時下において貯蓄が自己目的化し、地域の有力者にとっての自尊心の拠り所も変化した過程と帰結が、集約的に表現されている。戦費調達という抽象的な宣伝文句の下で毎年目標額が引き上げられ、終わりの見えない目的を提示されつづけた果てに、貯蓄という手段は「増して来るのが面白」いだけの目的と化した。

かかる自己目的化は、地域の指導者たる大人とて例外ではなかつた。貯蓄という目標の達成ではなく、子どもの素行が地域社会において協調的且つ適合的であるという意味において「善き少国民育成」に没入し、「子供よりも楽しくなつて」いた。指導者は、社会で求められる模範的な子どもを育成すること自体に喜びを見出した。だからこそ、戦局悪化の局面で制作された紙芝居『ヨイコノカクゴ』は、貯蓄を目的ではなく手段として強調し、国策への協力継続をうつたえたのであらう。

戦争末期の昭和十九年に発行された紙芝居『ヨイコノカクゴ』は、演劇挺身隊の隊員が戦地に慰問へ訪れた際の体験談という形で、前線に飛行機を送るための貯蓄の重要性を説く内容だつた。しかしながら、具体的な戦況は示されず、子どもの貯蓄では充足できるはずのない飛行機増産をうつたえるなど、実現可能性に乏しいものだつた。人びとは貯蓄額を増やすために貯蓄に勤しみ、やがて目的と手段を取り違えた。そして、国策や戦争協力を周知し、進める役割を担つたはずの地域の指導者層は、従順で協力的な子どもを育成してきた自分に酔い痴れ、充実感を抱く境地へ至つた。

## おわりに

本稿では、埼玉県立文書館収蔵の『絵ばなし』研究会」関連資料、

そして埼玉県立久喜図書館所蔵の紙芝居『ヨイコノカクゴ』を素材に、戦時下における貯蓄の位置付けの推移を確かめた。また、紙芝居を通じて国策を広める役割を担つた、地域の指導者にとっての貯蓄の位置付けを跡付けた。最後に行論を振り返り、本稿の成果をまとめるとともに、今後の展望を拓きたい。

昭和十二年、日中戦争勃発を機に国民精神総動員運動が開始された。同運動では、地域住民の話し合いの場である常会での国策周知などが目指された。その一環として、埼玉県各地で昭和十五年九月に開催された事業が、地域の指導者育成を目的とした『絵ばなし』研究会である。埼玉県が主催し、同県総務部時局課が所管したこの研究会では、広く人びとに国策を伝えるのに適した媒体として、紙芝居が使われた。実施にあたつては、埼玉県総務部長及び同県学務部長の連名により開催通知が発出され、国民精神総動員運動の関係者や日本教育紙芝居協会の職員らが講師として招かれた。主な受講対象は、県内市町村の役場や小学校の職員で、戦時下にもつべき心構えや、紙芝居についての講義、実演などが行われた。

実演で使われた作品は、軍国美談や地域における団結、満蒙開拓青少年義勇軍など、国策の宣伝や戦時下における心構えを説く内容が中心であつた。特に、貯蓄に関わる作品が多くみられた。ここから、地域における戦争への協力として、貯蓄の宣伝が重視された傾向を読み取れる。研究会は好評を博したもの、国策を多くの人びとに分かりやすく伝える指導者の育成が企図されたのとは裏腹に、貯蓄に対応する余裕のない地域で必要とされたのは、実情に合わせて国策へ対応する指導者であった。研究会のねらいと貯蓄をめぐる地域の対応には乖離があつた。

昭和十九年、戦局が悪化するなか、東京都は貯蓄を主題とした紙芝居『ヨイコノカクゴ』を製作した。内容は、雪国の村の子ども達が演劇挺身隊の漫才に接して、飛行機増産のための貯蓄に奮起するという筋書きで、劇中劇の形式により、前線における兵士の苦境が紹介された。作品の特徴としては、主に情緒的な側面から貯蓄の意義が訴えられる側面を読み取れた。また、大人が与える示唆を基に、子どもが貯蓄の重要性を発見するという筋道を見出した。かかる特徴は、同時期の紙芝居についての実践報告とも符合する。貯蓄は、達成額の増加に楽しみを感じるという意味で自己目的化していた。加えて地域の大人は、子どもへの指導の中身ではなく、従順で社会に適合的な行動をする子どもが育つたという成果から、指導者としての満足感を得るという転倒が起つた。

本稿で検討した、戦時下の紙芝居に関わる事業と作品からは、貯蓄の意義を伝え、広める地域の指導者が、国や戦争に協力する、あるいは国策を周知するという目的から出発しながらも、その本旨を貫徹するのではなく、貯蓄額の増大や従順な子どもの振る舞いから充実感を得るに至った変遷を見て取れる。現実と相渡らず硬直化した目的は、やがて手段に取つて代わられる。中国大陸での戦争は長期化し、アメリカ合衆国をはじめとする連合国との戦争も終わりが見定められない情況において、貯蓄は達成額の増加自体に、指導者は指導者であること自体に喜びが見出された。ここに、戦争の長期化と戦局の悪化により、人びとは自分自身の範疇で為し得る物事に注力するようになり、成し得た範囲において自身の満足を得るという心情の回路が成立した。

しかし、目的と化した手段は、前提となる情況の変化に対応できず、いずれは破綻を迎える。さりとて貯蓄の奨励は続けるしかない。あるいは

は、人びとに対して須らく国策への協力を求める他はない。ならば、破綻を避けるために、誰もが没入しやすい新たな目標を作り出せばよい。一見、情緒的で現実性に乏しいという特徴を有した紙芝居『ヨイコノカクゴ』で描かれた飛行機増産のための子どもによる貯蓄とは、戦局が悪化してなお行われねばならなかつた貯蓄の目標を、そして国策への協力を自覚する子どもを手助けするという大人の役割を再定位する意味を有したと評せよう。

戦時下の紙芝居をめぐる指導者養成の様相や作品からは、同時代の人びとの動向や大衆文化の内容が、現実認識を欠いたわけでも、狂信的な宣伝に明け暮れていたわけでもない傾向を読み取れる。そこには、国策に協力し、戦争に献身する意味と充実感を求めた人びとの欲望の移り変わりが存したのである。

本稿では、埼玉県下における紙芝居を介した指導者育成の事業と、貯蓄という主題を取り上げた作品に注目し、検討を行つた。今後も、戦時下の地域における紙芝居の具体的な足跡の探索を進めるとともに、作品に取り上げられた個別の主題に関わる描写の検討を深めたい。

## 付記

紙芝居『ヨイコノカクゴ』の調査及び撮影に際して、埼玉県立久喜図書館の小熊ますみ氏・田島奈津美氏、埼玉県立熊谷図書館浦和分室の濱田英理子氏より、懇切なるご配慮を賜つた。

また、埼玉県立文書館収蔵資料について、同館の新井浩文氏より種々のご教示を賜つた。

末筆ながらここに芳名を記し、心より感謝申し上げる。

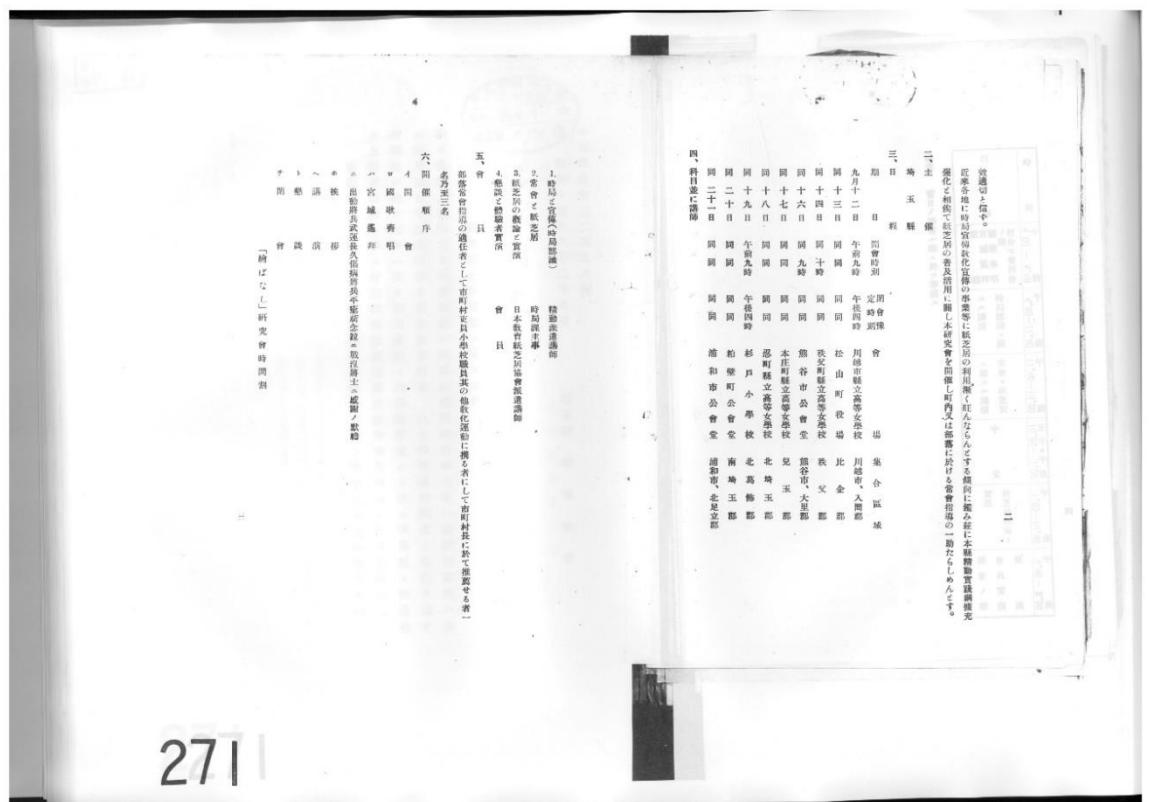
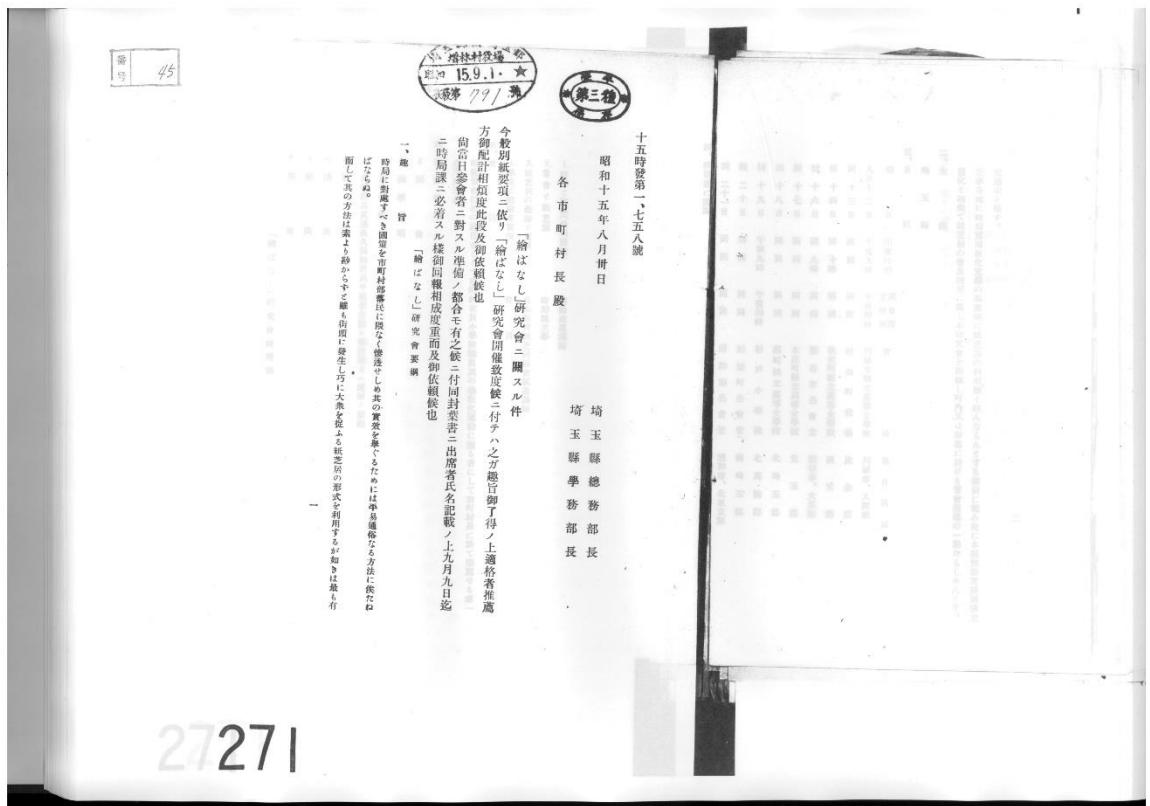
## 注

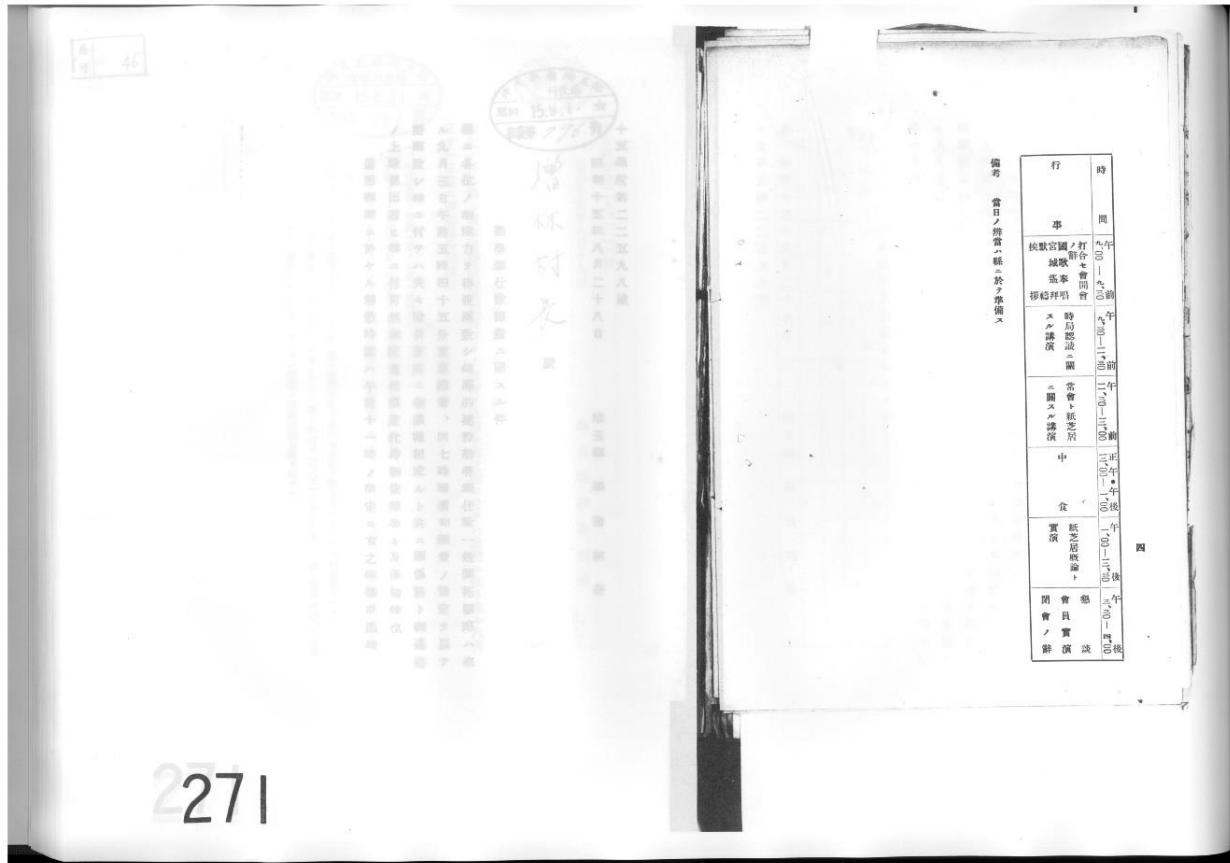
- (1) 近年の主たる研究成果は、安田常雄編著『国策紙芝居からみる日本の戦争』勉誠出版、平成三十年と大串潤児編『国策紙芝居 地域への視点・植民地の経験』御茶ノ水書房、令和四年等を参照。
- (2) 関野満夫『日本の戦争財政 日中戦争・アジア太平洋戦争の財政分析』中央大学出版部、令和三年、一七七～一八八頁。
- (3) 米山忠寛『昭和戦時期日本の国家財政と家計』（法政大学大原社会問題研究所・榎一江編『戦時期の労働と生活』法政大学出版局、平成三十年）二七五～二七九頁及び前掲『日本の戦争財政 日中戦争・アジア太平洋戦争の財政分析』八三頁。時期ごとに区分すれば、昭和十三年から行われた国民貯蓄奨励運動などを通じて公債消化と生産力拡充資金の合計額から貯蓄目標額が設定された時期、昭和十七年からの国家資力や国民所得の算定に基づく配分から貯蓄目標額が設定され、貯蓄額が割り当てられた時期に大別される。政策や戦況によって、貯蓄の位置付けや目標設定に変化した点に留意が必要である。
- (4) 常会については、長浜功『国民精神総動員の思想と構造 戦時下民衆教化の研究』明石書店、昭和六十二年の第二章や山本悠三『近代日本の思想善導と国民統合』校倉書房、平成二十三年の第五部等を参照。
- (5) 「絵ばなし」研究会二関スル件』（越谷市所蔵行政文書）C10548-45、埼玉県立文書館収蔵。『埼玉県関係行政文書件名目録 戦中戦後期編I』埼玉県立文書館、平成五年、五九頁。戦中戦後行政文書補完事業では、昭和元年（一九二六）から昭和三十年代までを対象に、県の発給文書を収蔵する各市町村や学校からマイクロフィルムでの撮影により収集され、複写本が作成された。同事業で収集された文書の目録は『埼玉県関係行政文書件名目録 戦中戦後期編I』（越谷市所蔵行政文書件名目録 戦中戦後期編I）に掲載されており、事業の概要是、前掲『埼玉県関係行政文書件名目録 戦中戦後期編I～III』各巻の「解説」で紹介されている。
- (6) 『埼玉県行政史 第二巻』埼玉県県政情報資料室、平成二年、一〇〇八頁。ただし、秩父郡については、当初予定されていた県立高等女学校（現県立秩父高等学校）ではなく、「秩父土木事務所会議室（元秩父郡役場跡）」に変更する旨の通知「絵ばなし研究会」会場変更二関スル件』（秩父市立図書館所蔵行政文書）C1563-1-25、埼玉県立文書館収蔵。『埼玉県関係行政文書件名目録 戦中戦後期編III』埼玉県立文書館、平成七年、一二九頁）が発せられた。また、これと同じ文書名が「最近ノ通牒照会抄」（『埼玉県報』第千三百八十八号、昭和十五年九月十三日、二三頁）に見られる。
- (7) 『時局紙芝居』登場 常会指導者を柔かに指導』（朝日新聞 埼玉版）昭和十五年九月十三日。取材は「十二日午前九時から県下にトップを切つて川越高
- (8) 『国民精神総動員運動』国民精神総動員本部、昭和十五年、一一一頁。
- (9) 『国民精神総動員運動』（マグダレナ・コウオジエイ編『視覚文化は何を伝えるか—近代日本と東アジアにおける表象資料』春風社、令和七年）一二七頁。『貯金爺さん』については同拙稿を、『がんばり村』（『国策紙芝居』（教育紙芝居）第二巻第一号、日本教育紙芝居協会、昭和十四年一月）六頁を参照。
- (10) 『国民精神総動員運動』（教育紙芝居研究会に臨んで）（『教育紙芝居』第三巻第十号、日本教育紙芝居協会、昭和十五年十月）三三頁。
- (11) 『埼玉県主催 教育紙芝居研究会に臨んで』（『教育紙芝居』第三巻第十号、日本教育紙芝居協会、昭和十五年十月）三三頁。
- (12) 『紙芝居貸出及配布二関スル件』（『越谷市所蔵行政文書』C10548-14、埼玉県立文書館収蔵。『埼玉県関係行政文書件名目録 戦中戦後期編I』埼玉県立文書館、平成五年、五九頁）。
- (13) 前掲拙稿「戦争が宿命になるとき」一三二頁。
- (14) 『朝日新聞』昭和十四年五月二十八日、朝刊一面。現在は埼玉県立久喜図書館所蔵だが、一部の文字面には「埼玉県立熊谷図書館」の黒印が捺されている。そのため、埼玉県立図書館内で所蔵館が変更された可能性を指摘できるが、詳細は不明である。
- (15) 『新規上場会社紹介（第二部・電気機器） 赤井商事株式会社』（『証券』二十一卷十二号、東京証券取引所総務部、昭和四十四年十二月、三十七～三十八頁）及び「この一年」（『紙芝居』第七卷十一号・復刊第一号、日本教育紙芝居協会、昭和二十一年十一月）一頁。
- (16) 『杉並区教育史 下巻』東京都杉並区教育委員会、昭和四十一年、三七八頁及び『昭和十六年 昭和二十年 郡山翼賛文化協会記録』（『郡山市史 第十巻 資料（下）』郡山市、昭和四十九年）一七二頁。
- (17) 『移動演劇を行なう集団で、戦時下において活動が奨励された。また、台湾でも皇民奉公会の下で設立された。戦時下の演劇については、神山彰編『戦時下の演劇—国策劇・外地・収容所』森話社、令和五年や小川史『一九四〇年代素人演劇史論—表現活動の教育的意義』春風社、令和二年を、台湾での演劇挺身隊について上杉允彦『皇民奉公会について（二）—植民地台灣における大政翼賛運動—』『高千穂論叢』第二十四卷第一号、高千穂大学高千穂学会、昭和六十三年六月や、邱昱翔『太平洋戦争期の布袋戲』『中國学志』第三十二号、大阪市立大学中国文学会、平成二十九年十一月等に詳しい。
- (18) ただし、「漫才」という言葉から、現在一般的に連想されるであろう笑いを含んだ内容とは少々異なり、言葉遊びが散見される点は注目に値する。具体的には、スコール雲について、「ワタアメのやうな雲ですよ」「だつて、スコール雲

はアメでせう？」という掛け合いが挙げられ、「漫才」が、言葉遊びに近い性質を有するものとして表現されている。また、「漫才師」という用語について、「死ぬ時だけ日本人として万歳を叫んで死なうと思った」—その時からです。僕たちのことを見た漫才師と呼ぶやうになつたのは（文字面六枚目）と、「万歳」と「漫才」という言葉を「マンザイ」という読みで関連付けている。更に、飛行機を前線に送ると誓う場面で「きつとこの誓ひは、空ごとに致しません」「空だのみにはいたしません」と、同じ「空」という文字に、飛行機が飛ぶ場所と嘘偽りという意味を重ねている。このように、冗談や戦時下の心構えを描く場面で言葉遊びが使われているのも、この作品の特徴である。

(20) 東京都品川区会議員 大塚実「紙芝居と貯蓄報国」（『紙芝居』第七卷第六号、日本教育紙芝居協会、昭和十九年六月）二十九頁。引用中の「双葉会子供国民貯蓄組合」という記載から、この組合が現在の東京都品川区二葉に所在した可能性を指摘できる。

【図版1】「絵ばなし」研究会二回スル件  
（『越谷市所蔵行政文書』C10548-45、埼玉県立文書館収蔵）





〔図版2〕 “時局紙芝居”登場 常会指導者を柔かに指導

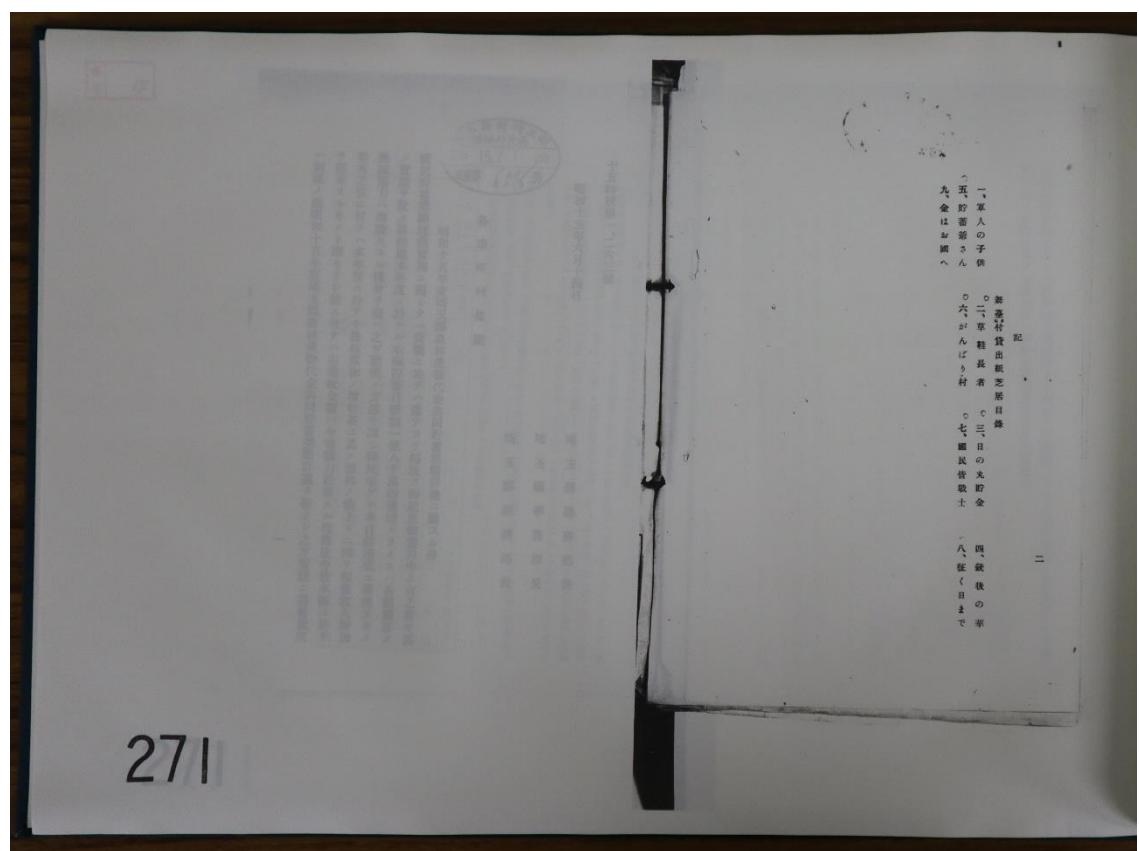
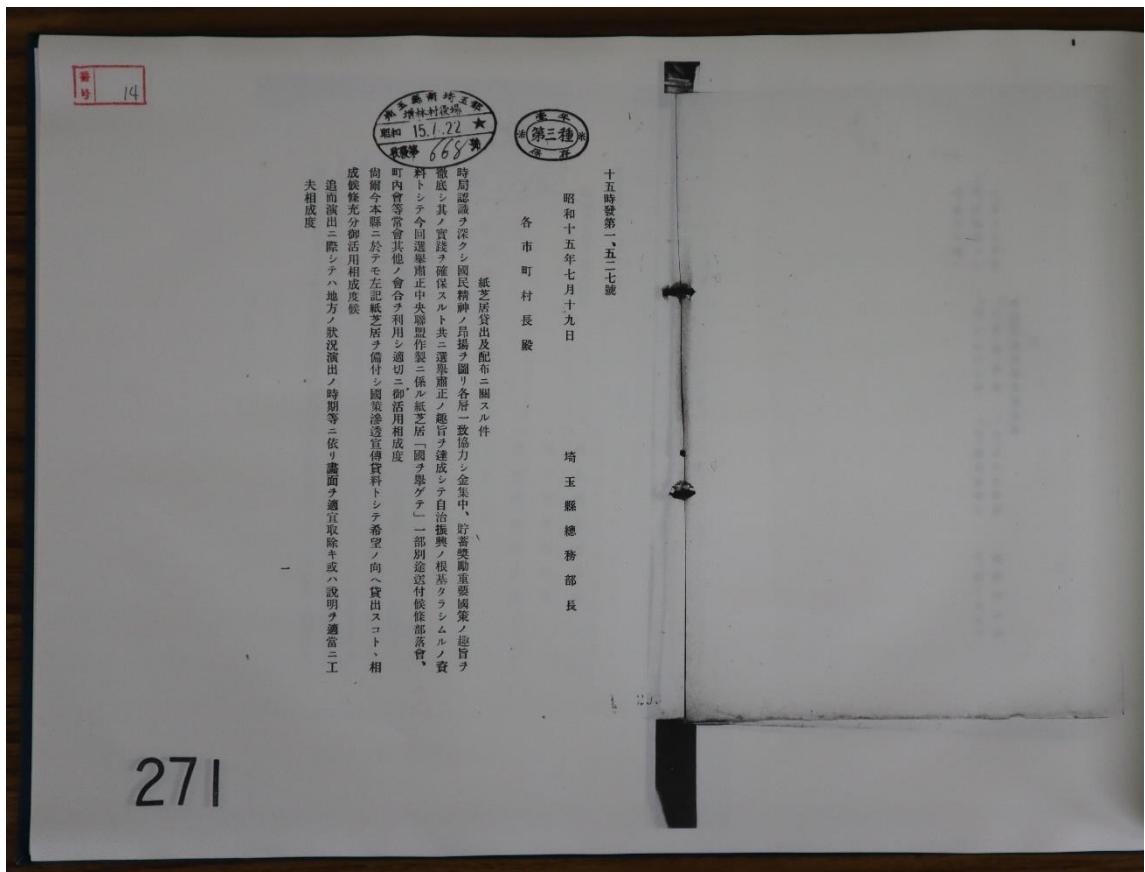
（『朝日新聞 埼玉版』昭和十五年九月十三日付け）

「時局紙芝居」登場

常々指導者を柔かに指導

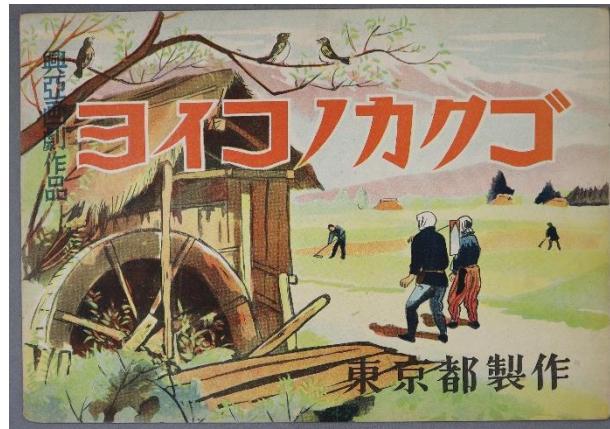
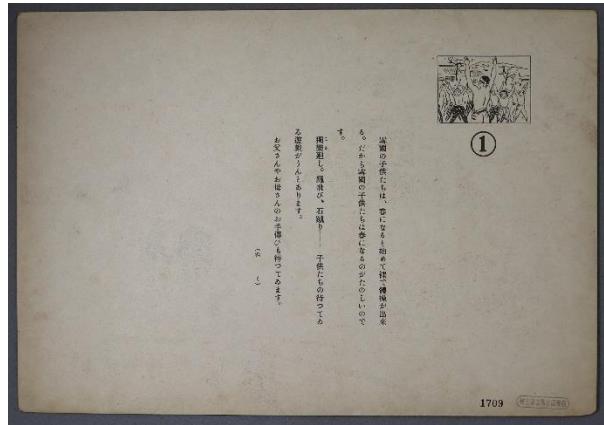
【図版3】平林博「埼玉県主催 教育紙芝居研究会に臨んで」  
（『教育紙芝居』第三卷第十号、日本教育紙芝居協会、昭和十五年十月、三三頁）

【図版4】「紙芝居貸出及配布二関スル件」  
〔越谷市所蔵行政文書〕C10548-14' 埼玉県立文書館収藏)

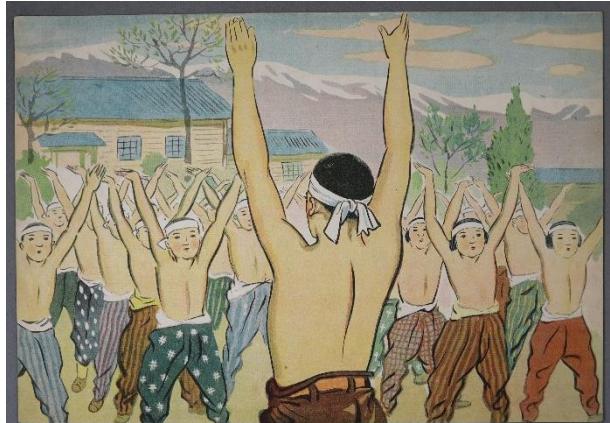
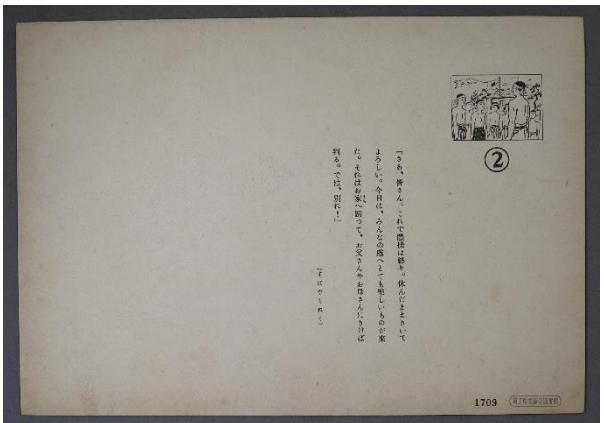


【図版5】紙芝居『ヨイコノカクゴ』

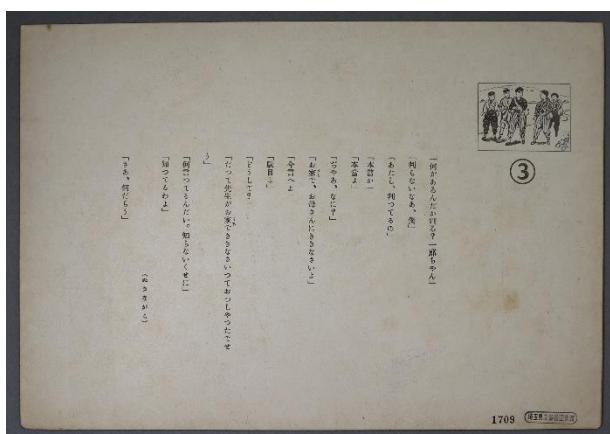
※横並びの一枚が同紙面



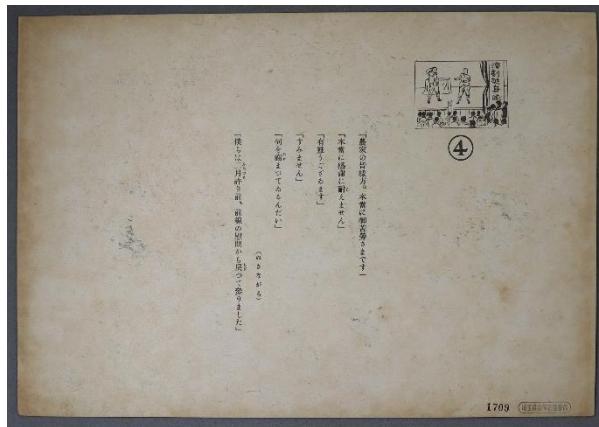
1枚目



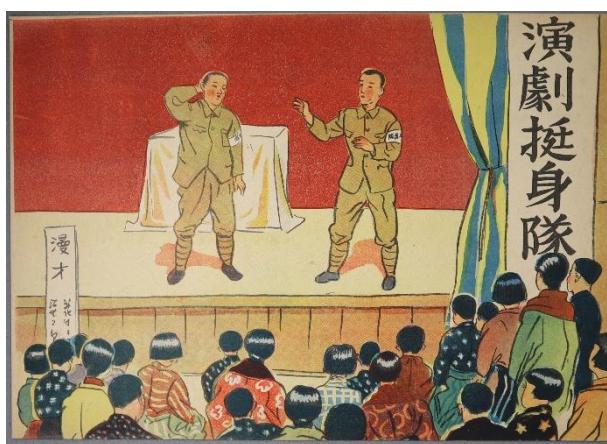
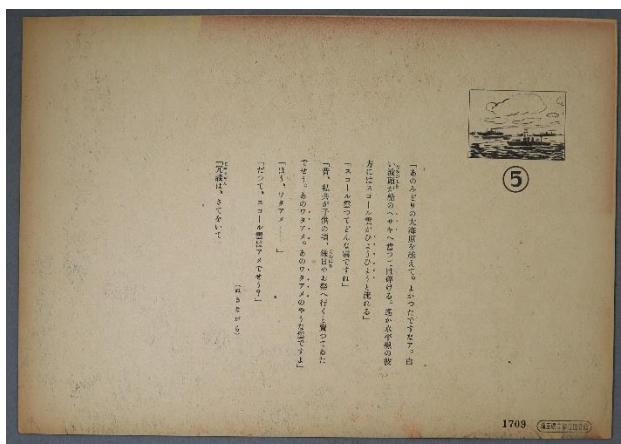
2枚目



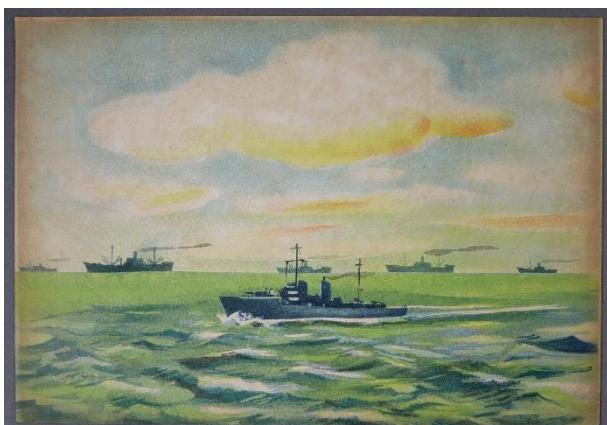
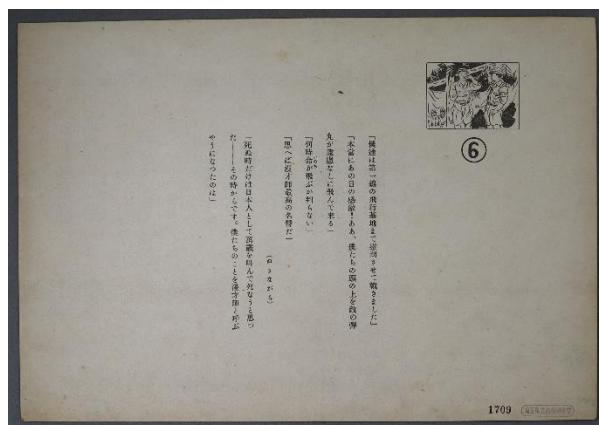
3枚目



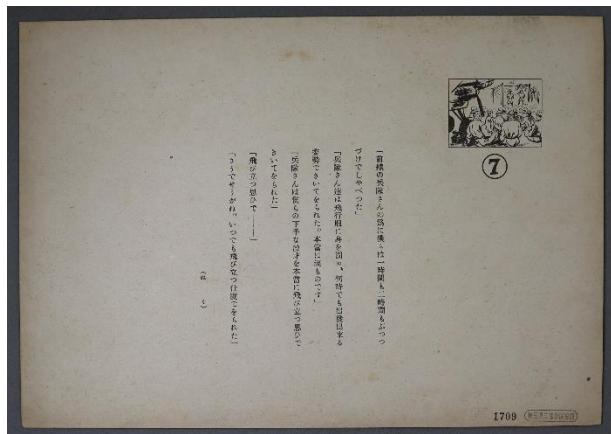
4枚目



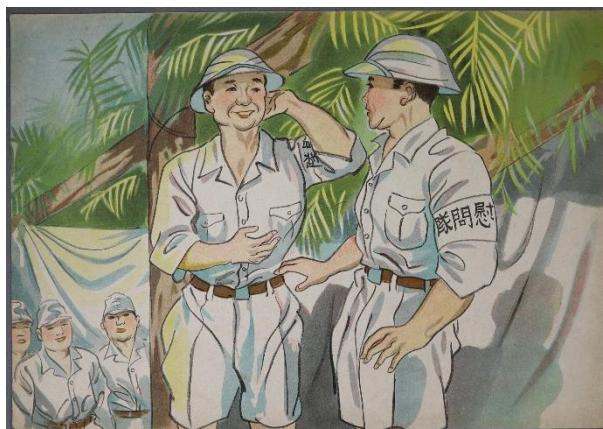
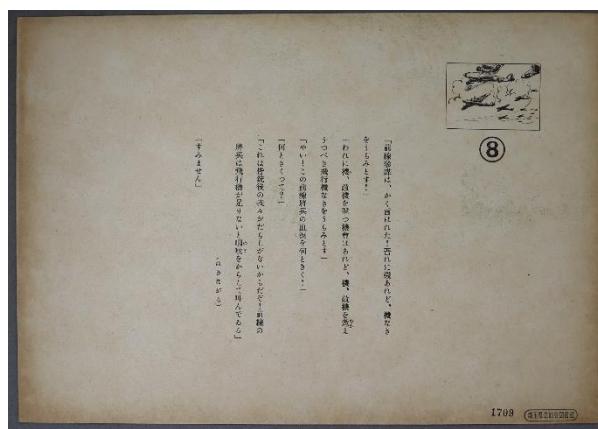
5枚目



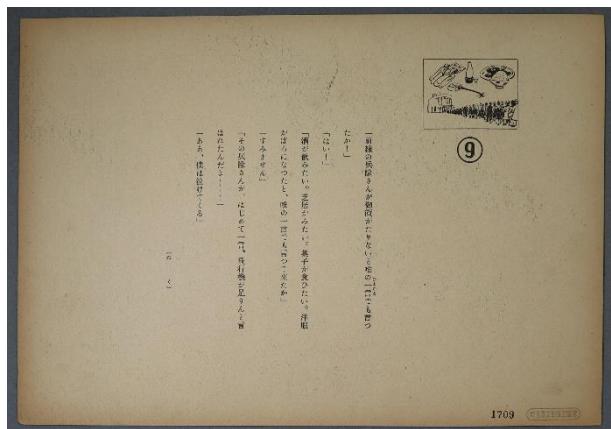
6枚目



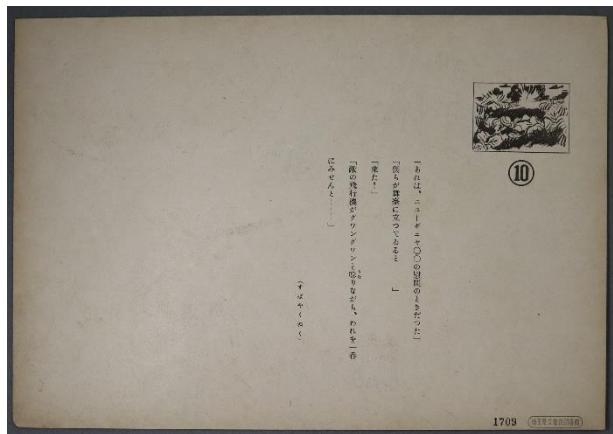
7枚目



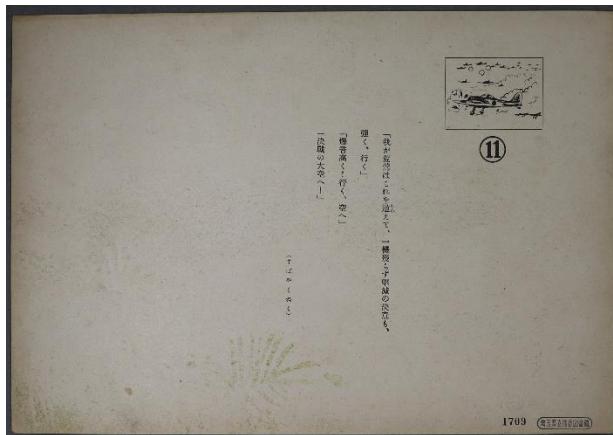
8枚目



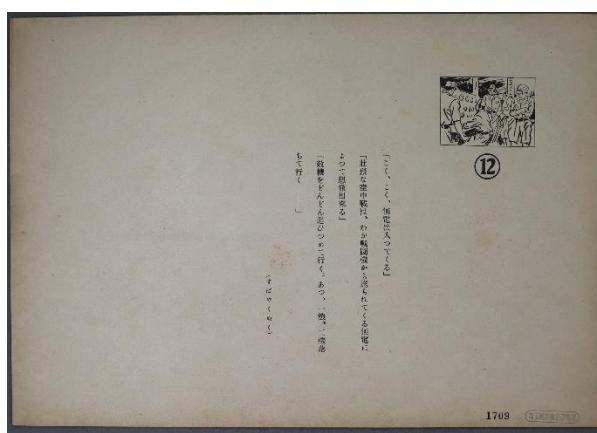
9枚目



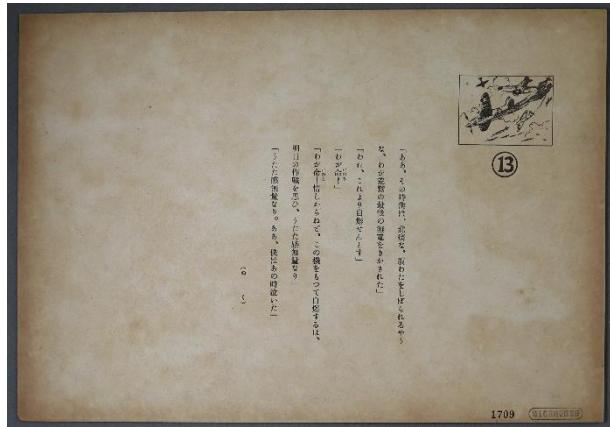
10 枚目



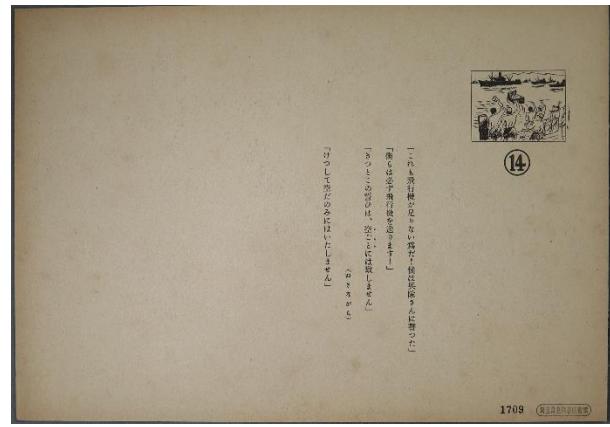
11 枚目



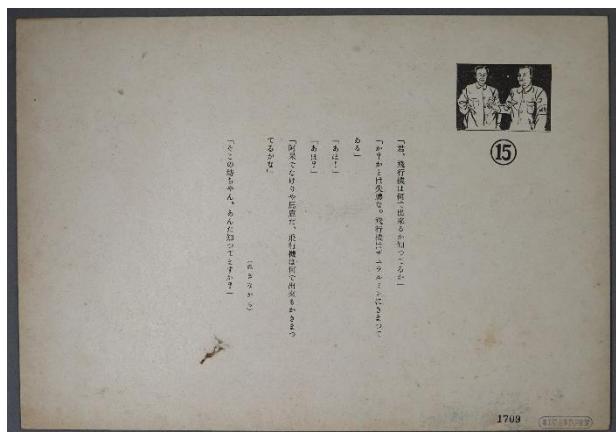
12 枚目



13 枚目



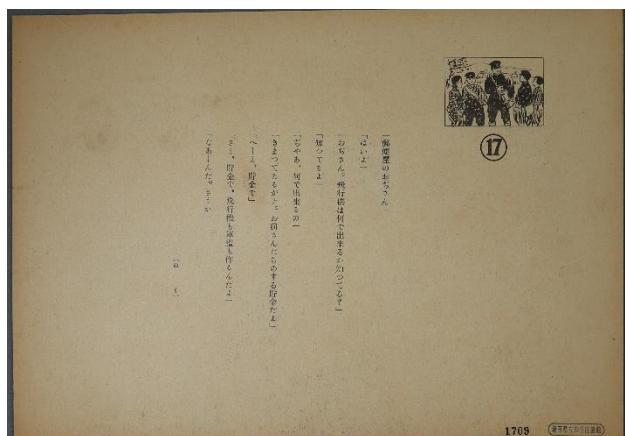
14 枚目



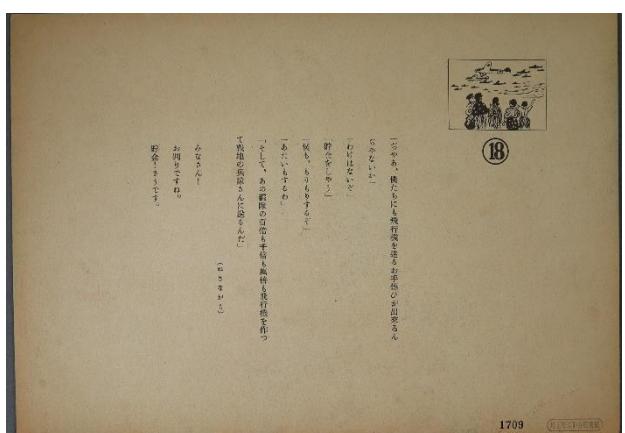
15枚目



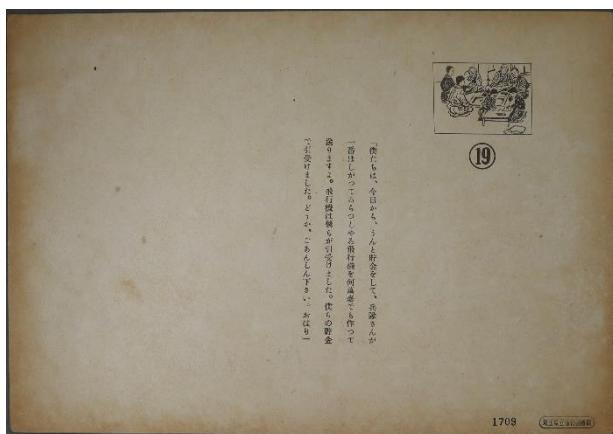
16 枚目



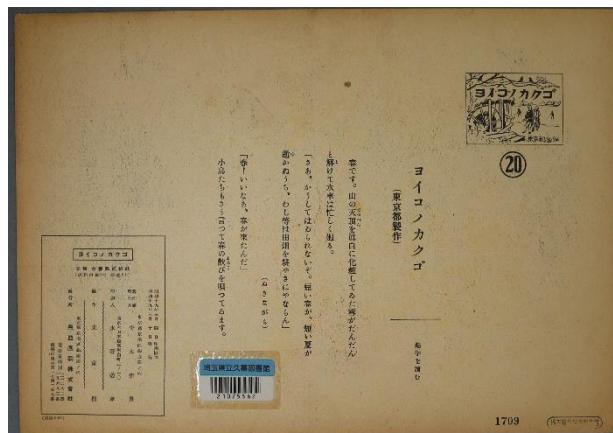
17 枚目



18 枚目



19枚目



20枚目

【別表】「絵ばなし」研究会における実演作品

作品名	概要
『朝日ニュース』 九月号	詳細不明。
『稻むらの火』	津波の際に村の稲に火をつけて危険帯の重要性を伝える。
『続後の力』	軍国美談の一つで、出征兵士の家族の借金を皆で返済するという内容。
『草鞋長者』	三十年にわたって貯金を続けた人物の話で、貯金の重要性を説く。
『興亞のしるべ』	昭和十五年国勢調査の趣旨と方法の徹底を説いた作品。内閣統計局指導、東京統計協会監修。
『小猿の恩返し』	怪我を治してもらつた猿達が、病気になつたお爺さんにサクランボやイチゴを持って、お見舞いに行く。
『青少年義勇軍』	満蒙開拓青少年義勇軍制度の事業業績を取り上げた作品。拓務省指導。
『埼玉県刑事協会指導防げ犯罪』	大蔵省国民貯蓄局指導。
『がんばり村』	「がんばり村」が貯蓄や献納、資源愛護に勤しむ「がんばり村」に変わること。
『貯金爺さん』	大蔵省国民貯蓄局指導。